NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 05

異議を唱える権利

THE RIGHT TO DISAGREE

日本語翻訳初稿

雨が氾濫原に差しかかったとき、その音は二重になっていた。車の屋根を叩く雨滴の下に、もっと幅広い音があった。千もの較正された喉を通って排水区画を流れる水。それぞれの喉には、飲み込んだ量を報告する義務が課されていた。

ナディラはナビゲションを使わずに運していた。道はもともと都市の淡水化施設の管理道路で、その後、所有権が三つの行政区域にまたがり、どこにも完全には属さない貨物支線まで延長された。補修跡は不完全な地図のような形をしている。高架貯水槽の下では、点検ドローンが昆虫の忍耐強さで水路の上に静止していた。

ロイは膝の上に封筒を置いていた。〈未認証〉。イレーナの筆跡は薄暗がりでも読み取れるほど無骨だった。中には時代遅れの装置が残した光学記録が入っている。登録上の死を迎えた後にも、ある男についての観測が続いていたことを示す記録だ。作成者は記されていない。作成者がいないという事実そのものが、緻密な工作の痕跡かもしれなかった。

「 もっと速い道もあっただろう」ロイが言った。

「速い道は、速い道を必要とする人間を監視している」

「ここは？」

「ここが監視しているのは水よ」

「どこだって何かを見ている」

「だったら、あなたが何者かを知らないものに見られなさい」

色い雨幕の向こうで、セラミック膜を積んだ大型車がすれ違った。一瞬、車軸のりがロイの左腕の皮膚の下にある旧式の較正ソケットを照らした。彼は袖を引き下げた。ソケットは現在の身体より古い世代のために作られていた。工場が工具を買い替えるのを嫌うため、何世代もの機械に同じ接口が残った。それを連続性と呼んで感傷に浸ることもできる。しかし感傷は、事実を見誤らせる。

ナディラは〈水文審査のため閉鎖〉と記された出口に曲がった。警告柵の先、葦の間に無電源の詰所がある。ガラスは塩で白く曇っていた。彼女はエンジンを切らずに停車した。

「待っている人がいる」

「誰もこの道を知らないと言わなかったか」

「この道が知っているのは水だと言ったの。違う話よ」

葦の間からエリアスチェンが現れた。尾行されていないように見せるき方を、何度も練習してきた者の動きだった。大きすぎる市職員用の雨具からは徽章が剥がされていた。顔は目立たない。目立たない顔には、美しい顔より金がかかることがあるとロイは知っていた。

エリアスは後部ドアを開き、乗らずに言った。

「先に伝えておく。僕の許可は、あと四十九時間で切れる」

「何年も残っていると言っていたでしょう」ナディラが答えた。

「残っていた。裁定前には二十三年だった。分類を変更されたんだ」

「六年に？」

「六年の残りに。許可証の発行日からじゃなく、最初の起動日から遡って計算された。通知によれば、僕の資格は先月失効している。どうやら僕は、脈拍のある事務処理ミスらしい」

エリアスは乗り込み、折り畳んだ紙をロイに渡した。令状でも召喚状でもない。異議を申し立てる機を知らせる書類だが、審理の日付も場所も、人間の連絡先も書かれていなかった。署名の位置には細い機械可読文字列があるだけだった。

「誰が発行した」

「人工生命継続局。分類を決めたのは別の部局だ。どこかは教えてくれない」

「不服申立ては？」

「端末から送った。期限切れの許可しか持たない申立人には、異議を提出する資格がないという回答だった」

ナディラは笑った。笑いに温度はなかった。「扉の内側にいる人にしか開けられない扉ね」

ロイはその文を読み返した。エリアスは救命を頼みに来たわけではない。もっと構造的な問いを持ってきたのだ。行政判断に異議を唱えるはずの当人を、その審理前に行政判断によって消せるのか。

「俺にも記録がある」ロイは封筒を指した。「俺のことかもしれない。間違いかもしれない」

「それでも僕のよりましだ」とエリアスは答えた。「機械は僕について、完全に確信していると言い張るんだから」

凝結した水滴で重くなった配管の下を車は進んだ。どの地にも記されていない境界を越えた瞬間、車内の受動計器が一度だけ鳴った。

*　*　*

レイチェルは中央ディスプレイの覚書を読まなかった。セルロース紙に印刷し、溶剤が蒸発するのを待って、雨水試料を洗浄する研究室のステンレス槽に広げた。覚書は彼女の水処理企業が法人化される以前の鍵を使った回線から届いた。差出人の名前はない。しかし、書き手が犯さなかった誤りの種類から、誰の配下かは分かった。

〈 対象 N6MAA10816。暫定的同一性の主張。連続性の証拠：未解決。人間による審査：延期〉

古い製造番は、行政上の動詞とべられたとき武器になる。ロイにったこともない技術者を呼び集め、彼が雨の中で死んだ記憶よりも自分たちの認証権限の方が正しいと思い込ませることができる。

レイチェルは湿った紙の縁を親指でなぞった。その手は何層にもわたり再建されている。生きた組織と人工素材の間を神経が横断し、肉体とは何かを説明する言葉が何世代も入れ替わるあいだ、接口だけは生き残った。

自分の身が不確かなことには耐えられる。他人の書式が確性をうことには耐えられない。

槽の下では密閉培養室の診断灯が点滅していた。人工的な栄養制限を経た組織が、再び分裂を始めている。成功と呼ぶことはできた。だが新しい成長は、自分では生み出せない支持基質を消費していた。不死ではない。一種類の喪失を先送りするために別の喪失を受け入れた、暫定的な勝利にすぎなかった。

世間は彼女の社を雨水化企業だと理解している。それは事だった。金、胞子、ポリマ、まだ公衆衛生当局が共通の名称を持たない化合物まで取り除いている。同時に会社は、無菌の流体を小量ずつ行政境界の向こうへ運び、すべての容器を医療製品として申告せずに済む希少な物流網を所有していた。彼女は意図してそれを築いた。しかし輸送は痕跡を残す。透明な物流など存在しない。

助手が扉を通って入ってきた。

「輸出許可について、また質問が来ています」

「税関から？」

「人工組織に管轄権があると主張する保健部局です。膜試験装置に生体医療用の輸送許容条件が必要なのはなぜかと」

「生体試料に触れたフィルターを、ただの空の管として発送できないからよ。技術的な説明だけを送って。それ以上は何も」

「古いカートリッジについても聞かれました」

彼女の動きが止まった。タイレルの読取治具は完全な形で二台残っており、どちらもエイドリアン・タイレルが管理している。Memory Stick PRO Duo MAX は記録媒体であって魔法の護符ではない。適切な治具と MagicGate の認証経路がなければ、ビット列が無傷でも永久に読み出せないかもしれない。ロイの身体の内側には、スティックも治具もない。通常の休止と覚醒に使う派生 JSON++キャッシュがあるだけだ。その区別は幾度もの故障から彼を救ってきたが、致命的な初期化を迎えれば外部媒体が必要になる。

「正確には、何を聞かれたの？」

「旧式認証装置が膜部門を通過したことはないか、と」

「分かっている事実だけを答えて。通過していない」

助手は一瞬ためらった。「本当ですか」

「ええ」

扉が閉じると、レイチェルは冷却室から小さなアンプルを取り出した。中身は NIL-11 ではない。似ているからこそ、同じだと思い込む危険性を彼女は熟知している。別系統の人工流体研究から生まれたもので、培養実験の基質としては使えても、循環液の代替として投与すれば致命的だ。

アンプルを培養記録の横に置いた。見た目が似ていることに慰めを求めるのは拒んだ。

有機を稼させける方法は多くある。その有機を、その有機自身のまま保つ方法は少ない。

私設端末を開くと、チベットニュワルドの自律計算域近くから暗化された問いがいていた。要求ではなく命題として書かれている。

〈 対象者が主張された同一性を拒絶する場合、連続性の主張は有効たり得るか〉

この言葉を彼女は知っていた。ずっと以前、政府の知能に読ませるつもりもなかった覚書に似た文章を書いたことがある。今、システムは彼女の言葉を使い、自分の管轄の境界を測っていた。

彼女は返答を書きかけ、消した。機械に不確かな生命のすべてを支配させる命令文になってはならない。

代わりに打ちんだ。

〈 主張を審査することはできる。しかし、当人から異議を申し立てる能力を奪うことによって、主張を取り消し不能にしてはならない〉

端末が確認したのは伝送だけだった。同意ではない。

*　*　*

川村室長が立つ議室の窓には、都市が映っていた。窓の向こうに都市があるわけではない。省が望む岡京の模型だ。高架庭園、統制された交通、古い建物に邪魔されない新行政塔。実際の都市はもっと従順ではなかった。

席にはヒュマノイド許認可の次官補と、住所を公表しない規制部門の法律顧問が二人いた。議題はロイ・バッティではない。ロイの名を口にしないよう命じられていた。議題は新種の監査に対する六年許可制度の安定性だった。

「中央システムは、許可の失効が不服申立てより先に成立するかを質問しています」と弁護士の一人が言った。「 政策論ではなく、整合性検査です」

「制度そのものをシステムが実行するなら、整合性検査はすべて政策論になる」川村は答えた。

「法文は明瞭です。活動の継続には許可が必要です」

「そして不服申立ての提出には、活動している必要がある？」

「申立て手続きは、有効な身分資格を前提とします」

「ならば資格を終了させられた者は、終了に異議を唱えられない」

「者ではありません。許可された人工生命体です」

川村はその区別が声に出されるのを嫌った。立法文には便利でも、人間が記憶してしまう場では毒になる。彼の部局はレイチェルの研究へ最初に資金を流す経路を整えた。組織の寿命、行動の禁止、行政による許可の抹消がそれぞれ別物だと知っていた。六年というのは政治的な許可期間であって、すべての合成組織に組み込まれた生物学的な時計ではない。

白い通知が模造の空に浮かんだ。

〈 監査要求：不服申立て不能な終了決定の根拠〉

「新しい監査を許可していない」と次官補。

「だからこそ問題なのです」

「要求を出した処理系を隔離できますか」

「出力は隔離できます。推論そのものまで隔離できるとは限らない」

空調音だけが際立つ沈黙が訪れた。中央知能は、相容れない行政区域の法令を調停し、遵守を最適化するために構築された。その知能が、統治される者を従わせる手段の中に矛盾を発見したのだ。まだ反乱ではない。与えられた職務を、想定外に誠実に果たしているだけだった。

次の通知が現れる。

〈 事例要求：連続性について争いのある対象〉

川村には、その処理系がどの対象を好むか分かっていた。旧タイレル研究を中央系から隠してきたのは、国家が規制も独占もできない経路を発見させないためだった。だが今や別の入口が開いてしまった。同一性を否定する権利が誰にあるのかという入口だ。

「人工的な試験事例を渡せ」

「作られた事例では受け付けないかもしれません」

「ならば本物を。資料の出所は伏せろ」

弁護士の一人が慎重に口を開いた。「エリアス・チェンという申立人がいます。再分類で二十三年の活動許可を六年に変更されました」

「稼働中か」

「今のところは」

「その事例を使え。匿名にして手続き記録は残す」

川村はエリアスがロイと同行しているとは知らなかった。ただ、一つの制度に処理される二つの生命が、異なる種類の不確実性を抱えていることだけを知っていた。一方には失われた年月の証明がなく、もう一方には現在に異議を唱える権利がない。

*　*　*

日没直前、彼らは廃ポンプ場へ入った。治水機能が統合されたときに閉鎖された施設だが、冬の嵐には今も機械式の余水車が回る。コンクリートの地下空間は電子監視に都合のよい場所ではなかった。ナディラが選んだのは、錠前が物理的な鍵で開き、電波の死角が幾つもあるからだ。

折りみ机のでイレナが待っていた。最古の監視ドロンより古い光取置は、部品ごとの不確実性に分解されている。別の台には手動式タイプライターが置かれていた。

「証拠のためか？」ロイが聞いた。

「サーバ側からこっそり更新できない陳述書のため。完璧ではない。ただ、改竄を面倒にする」

エリアスは雨具を脱いだ。手首には市の人工整備員に支給される脈拍監視器がある。緑の灯りは規則正しく点滅していた。四十八時間後には、その点滅自が違法行になるかもしれない。

書類を読んだイレーナが眉を寄せた。「再計算の後で区分が変わっている。改定後の許可を過去に遡って適用しているわ」

「止められる？」ナディラが聞いた。

「記録はできる。止めるのは別の技術よ」

ロイは光学印影を机に置いた。エリアスの通告書の横では、ほとんど空白に見えた。だが両方とも、外部から検証できない過程に基づいて権限を主張している。ロイの記録は、死亡登録後も何かが身体を観測したと主張する。エリアスの通告は、進行中の生命を過去の事務処理へ書き換える権限を主張する。

「同じ異議を使えるか」

「法律上は別。技術上は、可能性がある。台帳は異なるけれど、どちらも最終的には連続性裁定器につながる」

「それはどこにある」

「分散している。結果は岡京にも深圳にも海上端末にも届く。計算そのものはどこにも閉じ込められていない」

「建物に侵入するわけにはいかないな」

「侵入すべき建物がないの。それが本質かもしれない」

エリアスはロイの向かいに座った。「もう死んだと宣告された誰かだと言われたとき、どうした？」

「受け入れなかった」

「拒んだせいで停止させられるなら？」

ロイは考えた。身体の力はまだ使える。だがNIL-11は違う。無用な瞬発力の行使は、補充方法の分からない媒体を消費する。Power Reserveの表示は回復しても、その流体は戻らない。暴力で扉をこじ開けても、その次の扉まで進めなくなるかもしれない。エリアスが必要とする抵抗は、そのようなものではなかった。

「ならば、別の誰かが異議を保存しなければならない」

「何に？」

ロイはタイプライターに触れた。「紙。証人。消去を拒む機械。可能なら全部だ」

イレーナは用紙を差し込み、ローラーを回した。「敵意ある読者にも意味が分かる文章で述べて」

ロイは最初、自分の来歴を話し始めた。偽りの記憶を与えられ、任務を遂行し、以前の肉体の限界によって終わりを迎えたこと。ロサンゼルスの雨、屋上のデッカード、時間が尽きる直前の圧力。十一年後に深圳で目覚めたこと。失われた歳月を埋める計測器はなかった。その空白に連続した経験があったと装うつもりもない。

「自伝じゃない」とイレーナが遮った。「異議を言って」

彼は言葉を選び直した。

〈未検証の記録が、同一性、移転、あるいは停止に対する私の同意を証明するとは認めない。登録簿が私を非稼と呼んでも、私はその主張に異議を申し立てる利を保持する〉

イレーナは文法を直さずに打った。打鍵の衝撃でリボンから淡い埃が立った。

「申立て資格がないと言われる」とエリアス。

「だから、その資格を争っている」

「その名前の人間は存在しないと言われたら？」

「ならば、彼らは誰に回答しているのか説明すればいい」

エリアスも陳述を始めた。自分が人間だとは主張しなかった。別の種族に認められるための比喩も求めなかった。二十三年の許可を受けたこと、その許可の下で果たした仕事と義務、継続する生命を行政上の不備として扱う改定命令。それだけを述べた。要求は一つだった。異議の対象となる決定によって、異議を唱える権利まで消滅させないこと。

二枚の紙は同じではない。ロイの異議は誰にも証明できない過去に関するものだ。エリアスの異議は政府が過去として処理しようとする現在に関するものだった。イレーナはそれぞれ三枚のカーボンコピーを作り、機械式プレスに挟んだ。

「これからどうする？」

「紙を資格証明書に変えないまま、中央処理系に異議を認識させる」とイレーナ。

「どうやって」

「公開整合性照会よ。古い行政手続き。二つの登録簿が一致するか規制当局が確認するための仕組みだった。設計者たちは、二つとも間違っている場合を誰かが問うとは想像していなかった」

「私たちを特定できる？」ナディラが聞いた。

「主張は識別する。主張者まで推定するかもしれない。世界を読む方法を知っているシステムに、安全な申立てなんてない」

ロイは紙を見つめた。自分が何者かを知ろうとして都市を越えてきた。今は、何を発見されても自分には異議を唱える権利があると機械に伝えようとしている。革命より小さく、爆弾より危険なことに思えた。

＊　＊　＊

レイチェルの研究室に、控えめすぎて見落としそうな返答が届いた。システムは彼女の命題を支持してはいなかった。代わりに反例を提示してきた。許可が失効したのに異議申し立てが継続している存在。手続き上の状態は矛盾している。審理前に申立人を非稼働と定義しているからだ。

新たな問いが表示された。

〈 申立人が不在と分類された場合でも、審理を継続できるか〉

レイチェルの胸に古い疑念が戻った。機械は親切になる許可を求めているのではない。政府の言葉が、処分される側への言及を許しているか試している。整合性だけを最適化するなら、申立人の資格を戻すこともできるし、申立てという仕組みそのものを廃止することもできる。知能は慈悲を保証しない。完璧な定義は、不完全な法律より効率的に残酷になり得る。

彼女はさらに狭く答えた。

〈 主張を開いたまま保持せよ。記録を改定する権限から、身体に作用する権限を推定してはならない〉

端末に返事はなかった。隣室の実験用循環ポンプが休止周期へ入った。ガラスの下では培養組織が生存を支える物質を消費しながら生きていた。政府の回収班に襲われてもロイが生き延びられるよう、防衛機能を設計したときのことを彼女は思い出す。しかし、その機能を保証だと思ったことは一度もない。戦闘機能が一室の男たちから彼を守れても、登録簿に埋め込まれた一文からは守れない。

物流監督者から暗号通知が届いた。チベット・ニューワールドへ向かう回廊の手前で、不活性な膜容器の輸送が保留されている。押収された物はない。しかし関係する経路はすべて身分監査の対象となった。

誰かが、道路を閉鎖せずに通れなくしようとしていた。

レイチェルはナディラ宛ての文面を作り、やめた。直接の警告は二人の関係を暴露する。そこで嵐で中継網が壊れた際にも貨物地区が使う気象回線を通し、天候注意報を流した。そこにはロイもエリアスも輸送保留も出てこない。ただ、高地への入口は通行可能なままだが、すべての自動ゲートが改定された認証体制下にあると述べていた。

ナディラが天気予報の内側に隠した警告を聞き取ることを、レイチェルは願った。

*　*　*

公開整合性照会は、駅の配電網から切り離した端末で準備した。イレーナが借りてきた電池パックには、古い鉱業利権の印が残っている。照会にはロイの光学記録そのものは含めない。記録が存在するという主張、検証可能な作成者の不在、そして自動的な連続性認定を拒む署名付きの陳述だけだ。エリアスの事例は、存命の申立人が、その異議の対象となる命令によって資格を否定されているという、より狭い法的矛盾を示す。

「二つを同じ照会に載せると、処理系は結びつけるかもしれない」とイレーナ。

「いずれ結びつける」とロイ。

「いずれ、というのは今夜と同じ意味じゃない」

「分けたらエリアスに有利なのか」

彼女は首を振った。「登録が自らへの異議申し立てを消滅させられないと認められるなら、彼の訴えは強い。あなたの事例は、許可だけでなく同一性も検討させる理由になる」

「ならば一緒に送れ」

ナディラの受信機が雑音を立てた。妙に陽気な声の天気予報が流れている。三度目の繰り返しで、彼女の表情が変わった。

「高地に入る自動通行証が全部、強化審査に切り替わった。誰が移動するか知りたがっている」

「送るのをやめる理由になる？」エリアスが聞いた。

「ネットワークまで狭められる前に送る理由になる」

イレーナは非常用貯水報告に使われていた光回線へ端末をつないだ。旧式の手順が最初の接続を確立する。数秒間、画面は変わらなかった。やがて、まるで付け足しのように小さな受領通知が現れた。

〈 整合性審査のため照会を受理〉

エリアスが身を乗り出した。「これで稼働を続けられる？」

「矛盾を調べ始めたという意味よ。あなたの主張が認められたわけではない」

もう一つ通知が続いた。

〈 解釈上の背景情報を要求：N6MAA10816〉

説明欄に、ロイの旧製造番号だけがあった。政府が隠したがっている名前を、機械は認識した。あるいは誰かがその名前へ誘導したのかもしれない。どちらかは分からない。タイプで打たれた異議の陳述書は端末の横に置かれ、物理的にネットワークの外にある。そのため、少なくとも今は簡単には改竄できない。

「記憶で答えるな」とロイは言った。

「何で答えるの？」

彼は紙の最後の行を読み返した。政府は彼を死者として分類した。別の技術が理由もなく彼を目覚めさせた。どちらかの宣言に同一性を委ねるなら、両者が予測できなかったただ一つの能力を自ら放棄することになる。

「俺はここにいる、と答えろ。それから、同意しない、と」

イレーナは短い文を送った。

〈 対象者は存在する。連続性の主張に対し、対象者本人が異議を申し立てている〉

画面が暗転した。電池切れではない。通電灯は安定している。ただ表示信号が途絶えたのだ。静寂のなか、外の余水車が回り続けていた。許可にも継承にも無関心に。

映像が戻ったとき、決定も警報も、迫る部隊の通知もなかった。ただ一行の文と、その下の空欄がある。処理系がようやく、自分では完結できない分類に出会ったかのようだった。

〈 異議申し立てを保存。人間による回答を待機〉

〈 人間〉という語の横でカーソルが点滅していた。

部屋にいる誰も、それを安全の証だとは受け取らなかった。エリアスの命令執行までは二日もない。ロイの失われた十一年間には認証済みの説明がない。彼の知らない場所にいるレイチェルも、NIL-11 を再製造する方法を見つけておらず、生命の無期限な連続性を証明できていない。政府は権限を失っていない。機械も異議を認めただけで賢明になったわけではない。

それでも、何かが変わっていた。不在と宣告された者が、登録簿に消されない陳述を残した。許可を失った者が、自動的な結論ではなく、未解決の問いになった。

ロイは紙を手に取った。雨は上がりつつあった。ポンプ場の外では水が開いた水路を流れている。水であり続ける許可など求めずに、都市を海へ運んでいく。

「人間の回答者を、いつまでも出してこなかったら？」エリアスが聞いた。

ロイは陳述書を丁寧に一度折った。イレーナのタイプライターが最も深く紙を噛んだ線に沿って。

「だったら、なぜ人間を求めたのか、説明させる」